

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 23 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23500704

研究課題名(和文)近代柔術の理論と展開：嘉納治五郎の「武術としての柔道」の思想

研究課題名(英文)The theory of modern jujutsu and its development: Jugoro Kano's thought of "judo as a martial art"

研究代表者

志々田 文明 (Shishida, Fumiaki)

早稲田大学・スポーツ科学大学院・教授

研究者番号：80196378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：「古式の形」の水流及び虚倒、「五の形」の一本目に関する小谷澄之と大滝忠夫の方法と、富木謙治の同じ技についての指導内容とを当身技に対処する観点から比較し以下の解釈を得た。(1)嘉納が柔道に希求した護身性は、水流における受の手首を「目の高さに挙げる」方法の中にあると理解されること。(2)虚倒での取の受への体の接触に続く移動による崩しに柔術タイプの当身技が見られること。(3)「五の形」の一本目にも虚倒と同質の当身技の方法があること。(4)「精力善用国民体育」に見られる空手式の当身技は柔術の当身技と基本構造と異なると思われること。

以上から当身技を含めた柔道乱取り法の実現可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)： From the viewpoint of defending atemi-waza, present author obtained the following interpretations by comparing the investigation of Sumiyuki Kotani & Tadao Otaki's explanation of "mizunagare" and "Kodaore" in the "Koshiki-no-kata", the first kata of the "Itsutsu-no-kata" and Kenji Tomiki's instruction about the same techniques. (1) The practicality in judo that Kano pursued exists in the method of "pulling Uke's wrist upwards" in the Mizunagare. (2) The jujutsu type of atemi-waza is founded upon balance breaking by tori's touching uke and consecutive pushing of uke in the Kodaore. (3) The same type of atemi-waza as the Kodaore also exists in the first kata of the "Itsutsu-no-kata". (4) Karate-style of atemi-waza that is seen in "Seiryoku-zenyo-kokumin-taiiku" seems to have a different fundamental structure from the atemi-waza of jujutsu.

Thus, it is considered that there is the feasibility of method of free practice in judo that included atemi-waza.

研究分野：武道論

キーワード：柔術 柔道 武術 当身 五の形 嘉納治五郎 富木謙治 精力善用国民体育

1. 研究開始当初の背景

柔術は戦国期から近世以後に発達したが、剣術を表芸とする武士の時代には剣術の劣位におかれた。しかし近代に嘉納治五郎が登場し、天神真楊流と起倒流を母体に柔道を創始するに及び事態は一変した。

嘉納は従来の柔術が「勝負」を目的にしていたことを反省し、「体育」と「修心」を加えて近代社会の要請に応える「教育としての柔道」を創った。その後、柔道は着実・急速に発展し、剣道と並び称される地位を確立した。さらに戦後、柔道はオリンピック種目に採用されるに及び、日本を代表するスポーツの一種目(以下「競技柔道」)として大きく発展した。一方、この発展にともない学術的研究も様々なアプローチから蓄積がなされてきた。しかしそれらの多くは嘉納の近代性と偉大さを強調する文脈でのものであった。

こうした研究・教育状況に対して筆者が疑問を持ったのは、1970年代後半である。筑波大学体育研究科修士論文(嘉納治五郎の柔道観とその展開, 1979)の作成過程で出会った嘉納の様々な言説を読む中で、嘉納が競技柔道の現状に大きな不満を持っていたことに気づいた。例えば、「練習の際、何時打ったり突いたり蹴ったりして来るかも知れぬという心構えを以て相手に接しなければならぬ。それには頭や顔は相手から攻撃し難い位置に置かねばならぬ。(中略)出来るだけ四肢にも体駆にも力を入れず、自由自在に動作の出来るように、自然体の姿勢を保つ」(柔道, 1934年11月号)という指摘がある。それは当身技による攻撃を想定して武術(真剣勝負)の観点から柔道のあり方を正したものであり、審判規定の範囲外のことであった。さらに嘉納の1918年の論説には、将来を展望・予言して、「従来の柔道と剣道とは合体して一のものになる筈と思う」(柔道, 1918年7月号)とまで語っていた。武術としての柔道の発展に対する嘉納の言葉は、実践を伴う真摯なものであった。

その証拠は、嘉納は他武術の関心を持って、ボクシング、空手、合気柔術、棒術、レスリングなどを自ら研究し、一方で講道館内に武術研究所を設立して、他武術の研究の必要性和それらの優れた内容を柔道に統合する計画(剣に重きを置く柔道と剣を軽く見る柔道)をもっていたことである。それは嘉納が柔道に与えた概念「心身の力を最も有効に使用する道」(精力善用)から来る必然的な態度であった。

こうした嘉納の課題を受け継いだのが、第二代講道館長南郷次郎であった。南郷は講道館に「離隔体勢の技の研究委員会」を設置し、そのメンバー兼講師に、柔道家(6段)で当時

「合気武道」を修行していた富木謙治を指名し、研究が行われた。

こうした事情を不十分ながらも修士論文で指摘したのである。爾来30年の歳月が流れる中、筆者は2005年に、嘉納が教えようとし、それを受けて富木が研究を進めた広義の柔道技法に精通した武術家と出会い、修行・研究することになった。これによって、例えば、草創期の柔道に対する賛辞であった「講道館の足」という言葉の意味や、「五の形」の一本目の柔術技法的な解釈が可能となった。以上を踏まえて、史料の徹底した検証と実践に基づくより詳細な研究を決意した。

2. 研究の目的

嘉納の求めた理想の柔道が柔術の実戦性(護身性)に置かれていた点に着目し、柔道と他武術との関係の解明に通ずる以下の課題の解決を通して、近代柔術史を新しい文脈の中で再考する。

(1)当身技に対処する観点から見た、草創期の講道館柔道に見られる武術としての柔道と柔道の形(特に古式の形など)及び天神真楊流の形との関係。

(2)植芝盛平の大東流合気柔術のどの点に嘉納の求める武術性があったのか。

(3)唐手(空手)と精力善用国民体育との関係解明と、唐手と柔術及び武術としての柔道(それは当然離隔体勢の技法となる)との関係。

(4)富木の「柔道に於ける離隔体勢の技」理論(1942)とその後の発展の問題点。

3. 研究の方法

本研究は基本的に文献研究であるが、研究対象に応じてインタビューやバイオメカニクスの分析を行った。四つの課題に対応する形で主な研究者に分担して行い、研究代表者が総括する方法で行われた。

4. 研究成果

・平成23年度

学会大会等において以下の成果を発表した。

(1)「近代柔術の理論と展開:嘉納治五郎の「武術としての柔道」の思想」(体育学会大会)、

(2)「嘉納治五郎の柔道理論と富木謙治の展開」(スポーツ人類学会)

(1)では特に、嘉納が勝負法としての柔道のあり方に重大な関心を払い続けていたことを受けて、その思想が南郷次郎第二代講道館長へと継承され「離隔態勢の技の研究委員会」に結実したことについて明らかにし、当身を想定した講道館の稽古法は体さばきをよくし、

そこから自然発生的に足技を生んだのではないかと仮説を得た。

(2)では嘉納の武術における自然科学的思考法(具体から原理への機能的思考と原理から具体を考える演繹的思考)の具体的展開を検討し、嘉納の達成と限界を明らかにした。また、嘉納のこの文脈での研究を展開した柔道の実践的研究者富木謙治はその研究で何を、何故、どのように展開し、その達成と限界について明らかにした。

・平成24年度

IMACSSS会議(2012.6.8-10. 於イタリア・ジェノバ)で「“Judo principle” and “Kendo principle”: Jigoro Kano’s ideas and Kenji Tomiki’s theoretical development」について研究発表を行い、柔道原理と剣道原理の関係における嘉納から富木への理論的展開についての知見を報告した。

また湯浅(研究協力者)は同会議で「The Atemi in the jujutsu for medical applications: Focusing on Tenjin-shinyo-ryu」の演題で報告し、天神真楊流伝書では当身の名称や位置の多くが東洋医学の経穴と対応していることを解明した。

また志々田は日本体育学会第63回大会(2012.8.22. 於東海大学)で、「『柔道と剣道の合体』の術理 -嘉納治五郎の言説の意味」について研究発表を行い、その術理には柔道と剣道の合体する構想を実現させる重要な契機を含んでいることを明らかにした。

また湯浅は同大会において、「江戸時代における接骨の諸相と天神真楊流柔術との関係」について研究発表を行った。

さらに志々田はスポーツ社会学会第22回大会研究発表(2013.3.18-19. 於福山大学)において、「嘉納治五郎は柔道の何を「発明」しなかったのか?」について研究発表した。「古式の形」の打砕を分析し、当身技の柔術的表現と解釈される点があることを明らかにした。

志々田の研究成果は、“A Judo that incorporates Kendo: Jigoro Kano’s Ideas and their theoretical technical development”と題して、国際学術誌 Archives of Budoに発表された。この論文では、「古式の形」の水流に見る剣道原理の理合い、また虚倒に見る柔らかく相手に触れ、体の移動によって相手を崩す柔術的な当身技の存在について明らかにした。

・平成25年度

湯浅は、日本体育学会大会において、当身技の性格を掘り下げるために神真楊流の源流である楊心流を調査し、「楊心流胸積図における医学的、密教的要素」の演題で研究報告を行った。

また工藤(研究協力者)は、同学会大会において、植芝盛平のどこに嘉納の求める技術性があったのかとする研究課題に関連して

「植芝盛平の柔道對抗技の技術分析」に関する研究発表を行った。

志々田・Flynn(研究協力者)は、柔術(柔道)のあり方に関係して研究論文を国際誌に「How does the philosophy of martial arts manifest itself? Insights from Japanese martial arts」と題する論文を発表し、剣術・柔術・柔道における教育性の特徴を明らかにした。

・平成26年度

志々田らバイオメカニクス研究者を含む四名の研究チームが、「五の形」について、7文献の比較分析から抽出した動作を撮影して全動作の詳細な分析を行い、またバイオメカニクスの分析を行った。その結果、嘉納が創作した五の形の一本目には、「古式の形」の虚倒などと同様に、柔術における当身技の新しい可能性が見られることを明らかにした。

また嘉納の創作した「精力善用国民体育」の当身技を分析するために、志々田、池本、ジョン、劉の四名が、IMACSSS 国際会議(ポーランド)において、分担してそれぞれ研究発表を行った。特に志々田は、「精力善用国民体育」制定の理由の一つとして、嘉納が空手を導入することによって柔道家に当身技に対する危険性を気づかせ、それによって柔道家の悪い姿勢を矯正させるために制定した点を指摘した。

以上の志々田の研究から、「精力善用国民体育」に見られる空手式の当身技は柔術の当身技と基本構造と異なると示唆した。

湯浅は、日本体育学会大会において、「江戸時代における接骨の諸相と天神真楊流柔術との関係」について報告し、天神真楊流柔術は江戸から明治時代にかけて徐々に接骨の要素が加えられていったことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

- ・ Shishida, Fumiaki (2012) A Judo that Incorporates Kendo: Jigoro Kano’s Ideas and Their Theoretical Development, Archives of Budo, Vol.8(4), pp.225-233.
- ・ 湯浅有希子(2013)柔道整復の誕生: 1911-1920年における柔道整復の法制化を巡って, 体育史研究, Vol.30, pp.41-57
- ・ Shishida, F. & M. Flynn, M. S. (2013) How

does the philosophy of martial arts manifest itself? Insights from Japanese martial arts, "Ido Movement for Culture. Journal of Martial Arts Anthropology". Vol. 13, No. 3: 29-36. [DOI: [10.14589/ido.13.3.5](https://doi.org/10.14589/ido.13.3.5)]

- Shishida, F. (2013) IL Principio Del Judo E IL Principio Del Kendo: IE Idee DI Jigoro Kano L'evoluzione Teorica Di Kenji Tomiki, "Gioco, Dramma, Rito Nelle Arti Marziali e Negli Sport da Combattimento (I play, drama, ritual in martial arts and combat sports) pp.162-168. [In Italian]
- 志々田文明, 阪口正律, 佐藤忠之, 川上泰雄 (2014) 柔道の「五の形」一本目における当身技の術理: 柔術的当身技の視点から, スポーツ科学研究, 11: 212-224

〔雑誌論文〕(計5件)

〔学会発表〕(計16件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等
<http://ju-jutsu.jp/ja/>

6. 研究組織

(1)研究代表者
志々田 文明(SHISHIDA, Fumiaki)

早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授
研究者番号: 80196378

(2)研究分担者
()

研究者番号:

(3)連携研究者
田井 健太郎(Tai, Kentaro)・長崎国際大学・
人間社会学部・講師
研究者番号: 00454075